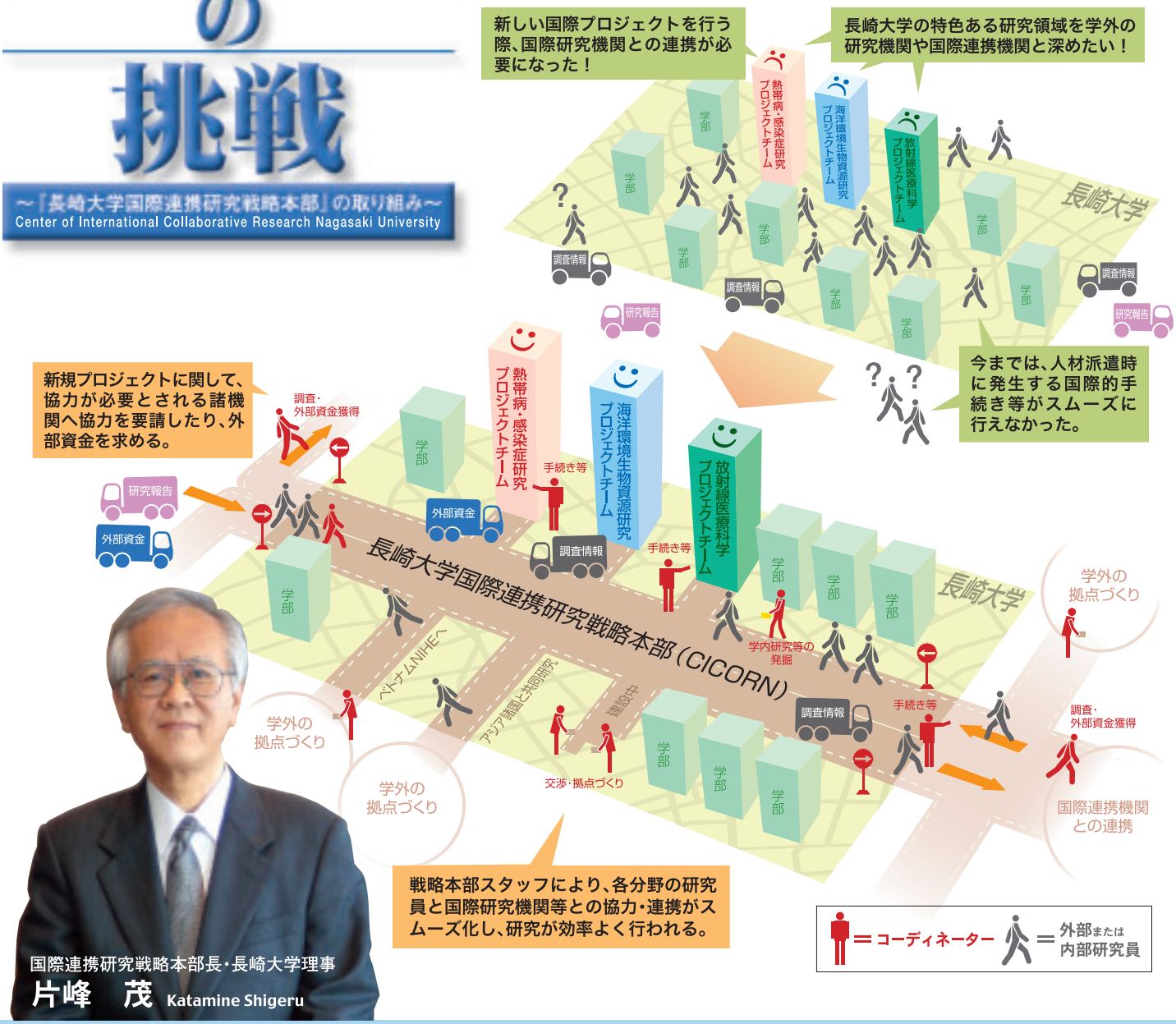
国際貢献を目指す CICORNの挑戦

～「長崎大学国際連携研究戦略本部」の取り組み～

Center of International Collaborative Research Nagasaki University

国際連携研究戦略本部イメージ図

長崎大学国際連携研究戦略本部（CICORN）は長崎大学にある「知」を学内外へ魅力的に発信する新組織。ここは各研究分野の運営面を支える副本部長とコーディネーターで構成されています。スタッフは研究者を経営面から支えるだけでなく、海外拠点づくり、国際連携機関との交渉、外部資金獲得など幅広い業務へ積極的に携わります。



国際連携研究戦略本部長・長崎大学理事
片峰　茂 Katamine Shigeru

［国際貢献に関する新組織の誕生］

2年前の国立大学法人化に際して、法人に付与された自由度を最大に活用し、他大学にまねのできない特色ある組織を新たに創り上げることを考えました。長崎大学の特長とは何か、頭をひねって行き当たったのが「国際」の2文字でした。こうして昨年4月に誕生したのが「国際連携研究戦略本部」です。英語でCICORN（サイコーン）と略称します。

まだ創成期の試行錯誤の最中ですが、国際畑に通じたプロ集団が集結し、全国的にも高い評価を得つつあります。CICORNのロゴマークには、Bringing a better future to allの標語の下に、CICORNから発する3本の線とその先に黄色の星が配してあります。3本の線は大学の重点3研究領域（感染症、放射線、海洋）を意味しており、黄色い星は若人をもイメージしています。「長崎から世界にはばたき、世界の星となれ」との思いを表したものです。

CICORN
Bringing a better future to all

長崎大学国際連携研究戦略本部ホームページ
http://www.cicorn.nagasaki-u.ac.jp

STAFF 国際機関を経験したスタッフの導入

戦略本部最前線で活躍するスタッフは、国際研究機関との接点が多くなることから、国際機関を経験した副本部長とコーディネーターで構成されています。当スタッフは、国際研究マネージメントの支援、新たなプロジェクトの発掘や企画などを行いながら長崎大学と国際研究機関とを密接につなぐ役割を担っています。

副本部長
平山 謙二
Hirayama Kenji

50年後、世界で大きく瞬くCICORNであるように

「長崎大学の将来像として私が描いているのは、世界の中で小さくてもきらりと光る大学です。大学の打ち出した中長期的な国際戦略によって、50年後には必ず知る人ぞ知る世界の長崎大学になっていることでしょう。

そして我々の仕事はCICORNの軌跡として長く語り継がれることになります。」

東京医科歯科大学大学院を修了後、九州大学生体防御医学研究所、聖マリアンナ医科大学、米国ハーバード大学、埼玉医科大学を経て、2001年4月長崎大学熱帯医学研究所教授に就任し、現在に至る。2004年4月から長崎大学学長補佐、2005年4月から副学長（国際戦略担当）。専門は、免疫学、免疫遺伝学、熱帯医学。医学博士。

WHAT IS？ 長崎大学国際連携研究戦略本部とは？

これまでわが国の大学の国際貢献はどちらかというと大学教員の個人プレーに頼っていた傾向にあります。しかも大学自身は直接相手国を支援する資金基盤を持っているわけではありません。国やさまざまな国際機関から国際貢献のための資金を獲得する必要があります。そのうえ国際協力・連携は国際的なルールにのっとり進めていかなければなりません。これらすべての問題を教員個人で処理することには限界があります。大学の持つ人的資源と知的資源をいかに効率的に相手国に注ぎ込むか、そしてその貢献をいかに根付かせるかが重要であり、それらの課題を実現させるために長崎大学国際連携研究戦略本部が作られました。

EFFORTS 大学の果たすべき国際貢献とは？

長崎大学は現在3つの重点項目で国際貢献を進めています。これらのプロジェクトではいずれも海外拠点や国際ネットワークを整備することにより、長崎大学が相手国において地に足が着いた国際貢献を成し遂げようと考えています。それはちょうど今から450年前わが国を訪れた最初のポルトガル人ルイス・デ・アルメイダが南蛮医学を日本に伝え、その後数多くの西欧人が長崎を拠点としてわが国へ西欧文化を広めていった歴史を思わせます。西欧の大学はこのような国際貢献の長い歴史と経験をもとに大学から発する国際貢献が相手国の政治・政策になくてはならない存在になっています。

ROLE 国際連携研究戦略本部が果たす役割

長崎大学国際連携研究戦略本部はまず長崎大学の人的・知的資源を掘り起こして大学が推し進める国際貢献を円滑にかつ、効率的に進めるためのコーディネートを行っていきます。そのために国や国際機関に働きかけてより多くの資金を獲得したり、相手国の状況に応じた種々の交渉や手続きを研究者に代わって行っていきます。例えば現在進行中の感染症プロジェクトではケニアやベトナムに構築した常駐型感染症拠点の運営を助けたり、JICAの大洋州予防接種プロジェクトを運営したりします。近い将来、本部の位置づけは長崎大学のみならず日本における国際貢献一般に重要な役割を果たすことが期待される存在になると考えています。

ベトナム国立衛生疫学研究所（NIHE）
現在、NIHE内に長崎大学共同研究実験室を設置し、日本からの研究者を常駐させた感染に関する研究が行われている。

コーディネーター
山科 知子
Yamashina Tomoko

商社の経験を存分に発揮したい

「長年の商社の経験を生かし、ベトナムNIHEの研究環境を整え、国内外のメーカとの交渉、貿易業務、そして学内調整を行います。少数精鋭で一人ひとりに任される部分が大きいので大変やりがいが大きいですね。」

スイス外資系企業に勤務後、大手日本商社に転職。輸出入貿易の業務に10年近く携わる。2002年に英国留学。ビジネス学部専攻後、翌2003年まで同商社ロンドン支店に勤務。2005年9月から現職。

コーディネーター
高野 直子
Takano Naoko

国際保健とヘルスシステムの活動の場を拡大

「CICORNでは、海外拠点のベトナムプロジェクト調整などを行っています。長年の海外生活の経験を生かし、海外拠点のプロジェクトを開拓しながら、国際保健とヘルスシステムの研究に従事し、活動の場を広げて行くのが目標です。」

国際基督教大学教養学部国際関係学科卒業後、外資系金融会社に就職。2001年米ボストン大学公衆衛生大学院留学（国際保健学・感染症疫学専攻）。2003年からWHO健康開発総合研究センターのテクニカルオフィサーを経て、2005年9月から現職。

チーフコーディネーター
松山 章子
Matsuyama Akiko

CICORNはチャレンジングな仕事

「大学の本来の役割である研究、教育、社会貢献を国際的なレベルで戦略的に行うCICORN。各分野の専門的事柄と事務の橋渡しや、海外を含む大学内外のネットワークづくりなど、とても魅力的な仕事でやりがいを感じます。」

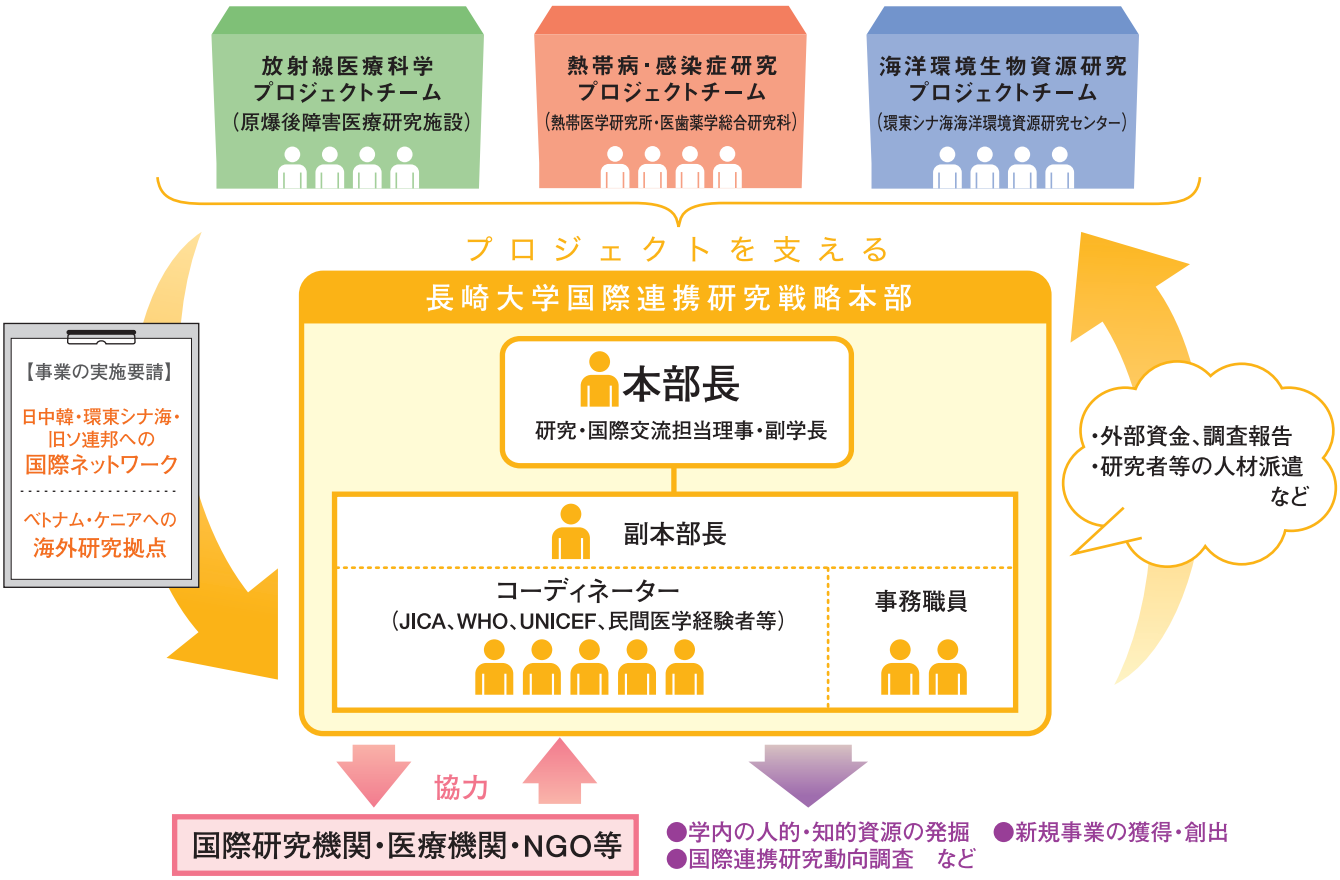
熊本県出身。大学卒業後、フィリピン、パキスタン、バングラデシュ、ネパール、インドネシアにユニセフ(国連児童基金)、NGO、JICAなどの仕事で約8年近く滞在し、女性や子供の健康、開発の仕事に従事。長崎大学には2005年5月に熱帯医学研究所に入り、10月から現職。専門は医療人類学、女性の健康。ジョンズホプキンズ大学にて博士号取得(国際保健・医療人類学)。

コーディネーター
古矢 佳男
Furuya Yoshio

世界の研究者の支えとなっていきたい

「ベトナムの首都ハノイにある国立衛生疫学研究所(NIHE)と長崎大学との間でプロジェクトが開始され、そこに開設される共同利用研究室に勤務しています。プロジェクトの研究活動で日本やベトナムの研究者が各研究に専念できるよう、後方から支援しています。」

WHOの太平洋地域リンパ性フィラリア症撲滅計画(PacELF)においてアシスタント・プログラムオフィサーとして2年間フィジー勤務。臨床検査技師、青年海外協力隊、ODAコンサルタント、国連ボランティア等も務める。



国際連携研究戦略本部 機構図

コーディネーター
ソール・ヘルフェンバイン
Saul Helfenbein

「連携」と「戦略」の2方面を強化

「CICORNが特に国際保健や他の分野における国際連携研究のための戦略を打ち立てることが大切です。マネージメント能力を強化し、信頼性を高め、外部資金獲得につなげる必要があります。」

公衆衛生プログラム改善のためのマネージメントシステム強化専門担当。HIV/AIDS、リプロダクティブ・ヘルス、母子保健の分野においてアジア、アフリカ諸国で長年仕事に携わる。戦略本部以前は、ボストン大学保健医療プロジェクトチームで8年、アメリカの大手NGOであるMSH(Management Sciences for Health)に18年勤務。また、日本の外務省外郭団体であるFASID(国際開発高等教育機構)で実施されているHIV/AIDSのトレーニングコースのファシリテーターを務める。

前国際連携研究戦略本部マネージャー・戦略本部企画・立案者
國井 修 Kunii Osamu

国際化のリーダー的存在を目指すCICORNに期待

「設立前から人材や組織の方向性について議論を重ね、ようやく誕生したCICORN。長崎の出島が日本の世界への窓であったように、CICORNが日本の大学の国際化をリードする組織として発展して欲しいですね。」

自治医科大学卒業後、在日外国人に対する医療サービス充実や無医村での医療活動に従事。1993年、米国ハーバード大学公衆衛生大学院で公衆衛生学修士(MPH)取得。2000年に東京大学大学院医学系研究科講師。2001年、外務省経済協力局課長補佐。2004年、長崎大学熱帯医学研究所教授。2006年2月より米ニューヨークの国連児童基金(ユニセフ)本部保健医療局の新設ポストに赴任。

大学の国際化に関するシンポジウムの様子。約200名が参加者した。（長崎市内のホテルにて）

TOPIC

大学の国際化に関するシンポジウム・運営会議を開催

1月23日（月）長崎大学国際連携研究戦略本部主催の「大学の国際化に関するシンポジウム」が長崎市内のホテルにおいて開催されました。

シンポジウムでは、精力的に国際化に関する活動を行っている文部科学省、早稲田大学、立命館大学を例に、これから国際化に向けて

ショート対談

人材こそがCICORNの鍵

ソール・ヘルフェンバイン ＋ 國井 修

医療分野の国際貢献とはどのようなものかについて国際連携研究戦略本部のスタッフであるソール・ヘルフェンバイン教授と國井氏による対談が行われました。本対談は英語で行われたものを日本語訳にしたものです。

國井　本日は、長崎大学国際連携研究戦略本部（CICORN）についてお話をするとともに、CICORNが新たにお迎えしたソール・ヘルフェンバイン教授を皆様にご紹介したいと思います。

ヘルフェンバイン　私が公衆衛生に携わるようになったのは、1969年のことで、さまざまなフィールドで仕事をしてきました。日本と関わるようになったのは、1994年に日本政府が行った2つの提言がきっかけでした。

1994年にカイロで開催された人口開発会議で、日本政府の地球規模の問題に主導的に関わり、また、リプロダクティブ・ヘルス（性と生殖に関する健康）とHIV／AIDS問題が、日米間の共通課題に設定されました。国際開発高等教育機構（FASID）では、約12年間に渡ってHIV／AIDS分野のプロジェクト策定および管理に関し、ボストンに本部を持つ「マネジメント・サイエンセス・フォー・ヘルス（健康科学の管理機構）」という米国の組織にも関わってきました。この組織は、公衆衛生分野における日本の指導力を開発するという、大変興味深いプログラムを実施するとともに、「岩村国際保健フェローシップ」を創設しました。また、日本のNGO「HANDS」の創設時には、設立の支援を行い、初期の段階でお手伝いをしました。

國井　ありがとうございました。それでは、公衆衛生における世界的な問題と、それらの問題への対処方法についてもお聞かせ下さい。

ヘルフェンバイン　主な病気の根絶は、依然として大きな課題です。麻疹や肝炎をはじめとする基本的な小児疾患の一部は、予防が可能となってきました。そして、ポリオも、おそらく近い将来には根絶へと向かうでしょう。しかし、まだ問題のある疾患が数多くあります。多くの寄生虫症や水を媒介とする感染症が原因で、多くの人々が亡くなったり、苦しんだりしています。マラリアでは、年間300万人もの子供たちが犠牲となっています。

取り組みが必要な国際保健分野の問題の一つに、医療サービスへのアクセスがあります。開発途上国で基本的医療サービスを恒常的に利用しているのは、人口のわずか10～20％と推定されています。サービスを利用する人々の割合が低いため、多くの人々が、健康を損なっています。これは、医療へのアクセスの問題であり、対応が必要です。

もう一つの大きな問題は、医療サービスの管理です。医療サービスは、しばしば不充分な形で管理されています。そのため、極めて限られた財源が、無駄あるいは非効率な形で利用されることが多いのです。よりよい計画立案・監視・評価、財務管理、物資輸送、および情報システムを通じて、管理のあり方を改善しなければなりません。

取り組みが必要なその他の領域としては、子供のための予防接種拡大計画（EPI）、家族計画等、以前と比較して財源が縮小してきているプログラムの問題があります。私は家族計画およびEPIを「終わりのない仕事」と呼びたいと思います。

國井　次にCICORNへの期待についてお話し下さい。

ヘルフェンバイン　CICORNのプログラムの多くは、研究を中心に据えたものと思われます。研究自体は素晴らしいものですが、研究の問題とは、研究の成果をいかに素早く人々のために役立てるかということです。この研究成果の利用の問題に、取り組む必要があります。

長崎大学国際連携研究戦略本部
コーディネーター
ソール・ヘルフェンバイン
Saul Helfenbein

ショートレポート

今、国際貢献に求められるもの

～大学の国際化に関するシンポジウムより～

今、国際化の波は大学でも顕著です。今回行われた「大学の国際化に関するシンポジウム」に参加していただいたパネリストのみなさんに、大学の国際化に必要なキーワードを尋ねました。

渡辺 その子（文部科学省科学技術・学術政策局国際交流官付国際交流推進官）

「現在各国際機関の活動により、世界にはインフラ整備が進み貧困から脱却しつつある国が多くあります。そういう国には次の段階として技術支援、技術転移という体制が確立されていかなければなりません。私は大学が果たせる役割の中に、このような支援や、彼ら自ら世界の研究競争に参画できる体制づくりがあると思います。」

村岡 洋一（早稲田大学研究推進担当常任理事）

「私学は授業料で成り立っている分、学生に国際的な舞台へ出向くチャンスを与え、教育面からサポートすることでトップを目指す国際貢献を行っています。しかし、国公立大学は財務状況を判断しながら、国際関連や各研究分野にうまく金銭を投資できるところです。長崎大学ができる国際貢献のいろいろな可能性に期待しています。」

慈道 裕治（立命館大学国際機構長）

「学生が将来、国際的な貢献を果たせるよう、私立大学はすでに様々な環境づくりを行っていますが、これからは職員にも目を向け、職員の皆さんに国際貢献について、どう夢や高い志を植え付けていくかが必要だと思います。また、職員の持つ組織的力量に注目し、学生と共に国際化に貢献できる組織ができれば良いと思います。」

Walther H. Wernsdorfer
（ウィーン医科大学熱帯医学予防研究所教授）

「ぜひ、メディアの活用を実践していただきたい。海外では国際的研究の評価が、いかに質の高いメディアを用いて、研究を公表できるかにかかっています。そのような場に出向くことも一つの国際貢献の形ではないでしょうか…。」

浦元 義照（国際連合児童基金東京事務所日本・韓国兼任代表）

「大学と民間、官公庁とのつながりがスムーズになることが大切だと思います。各機関の人間がスムーズに行き来できれば、縦割りの行政体制も薄れ、民間と官公庁などの協力が押し進められます。そうすると、いち早く国際関連のさまざまな諸問題に対して対応できるはずです。長崎大学もそういう貢献をしていただければと思います。」

池上 清子（国際連合人口基金東京事務所長）

「大学の国際貢献に必要なことは、『国内を見渡す』『プロジェクトの主宰となる』『留学経験者の学生と共に行う』ということ。やはり、国際貢献に携わる人には、英語を使いこなせる方が必須でしょう。話せるだけでなく、自分の意見を英語で述べ、書け、発表できる力が必要とされますから。」

パネルディスカッション

必要とされる理念・方針等の講演が行われました。

さらに、パネルディスカッションも行われ、『国際貢献における大学の役割とは何か』についてさまざまな提言等が出されました。

また、翌24日（火）、国際戦略を強化する事業指針と、さまざまなプロジェクトに関して、大学内外からなる運営委員による運営会議を実施。

ここでは各委員の専門的立場から、長崎大学国際連携研究戦略本部への助言、提案等の意見交換が行われました。

運営会議

第2に、大学とは、科学およびその他の分野に将来従事する人々を訓練する機関であるため、実施されるプロジェクトの人的能力の開発に、一層の注意を払う必要があるかと思います。長崎大学の学生だけではなく、プロジェクト実施国の人々を含めての人的能力の開発です。

例えば、ベトナムまたはケニアで実験室や研究拠点を整備する場合、ケニア人またはベトナム人研究者の能力を開発するための基盤として、その拠点をどのように利用するのでしょうか。今、私たちが直面している結核やＨＩＶ／ＡＩＤＳの問題では、優秀で効率的な研究室を有していることが極めて重要となっています。日本人研究者のための実験拠点の整備を、開発途上国における全般的な実験設備能力の開発という、より規模の大きなシステム開発の問題に取り組むための足がかりとするチャンスではないかと感じています。

そして、3番目の有用な領域は、情報の共有です。これは、研究者のみならず、医療制度の開発に携わる全ての人に関わる問題です。特定のプロジェクトの参加者間だけではなく、国家、地域そして国際的な規模でのより頻度の高い情報の共有が必要です。情報の共有化によって、新しいアイディアが生まれ、各種プロジェクト間の相乗効果や融合が可能となります。

國井　お話し下さいましたように、ＣＩＣＯＲＮは、情報の共有化を進めておりますし、現行の3つのプロジェクトを拡大していくことを望んでいます。実際のところ、ＣＩＣＯＲＮは、長崎大学と世界を結ぶ架け橋のようなものです。また、学際的なプロジェクトの運営も行いたいと考えています。

そして、研究だけではなく人材開発や世界のニーズに応えるための活動の拡大を目指しています。また、国内外の民間および公的機関とも、よりよい協調関係を築くことを望んでいます。

最後に、その使命や戦略と共に、人材こそがＣＩＣＯＲＮの鍵であることを付け加えさせていただきたいと思います。

前国際連携研究戦略本部マネージャー・戦略本部企画・立案者
國井　修
Kunii Osamu